

出題分析			
試験時間 120 分/2 科目	配点 100 点	大問数 3 題	
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]		
<p>【概評】</p> <p>大問数は昨年と同じ 3 問で、I が芳香族化合物、II が糖類を題材にしており、2 問が有機化学中心の出題であった。III では、最近定着した、見慣れない実験を題材とする思考問題が出題された。質量保存則に関する実験であったが、実験操作に関する設問では、多くの受験生がどう考えるのか戸惑ったのではないかと推察される。一方で、I、II は比較的平易であったため、I、II と III の実験操作以外の設問で、確実に得点を積み上げる必要があった。今年は計算問題が 6 問と少なかったものの、一部で導出過程が要求され、思考問題では根拠の記述が要求されているので、手際よく答案を作成する練習を積んでいた受験生が有利だったのではないかと推察される。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	芳香族化合物の反応と性質、フェノールの合成	フェノールの合成法と性質を軸に、頻出の知識を問う典型問題。教科書レベルの知識問題を主に構成されているため、ミスなく完答したい。空所補充 1 題、選択 3 題、反応式 1 題、記述 1 題、論述 1 題	易
II	糖類、アミロースとアミロペクチン	1. と 2. は基本的。3. は、フィッシャーの投影図に慣れていない受験生にとっては簡単だったであろう。4. も、多数のアミロースどうしが 1、6-結合したものがアミロペクチンであることを知っていれば問題ない。5. については、アミロースの物質質量と生成物のマルトースの物質質量とを区別する必要があり、混乱を誘う。(1) (ii) と (iii) は、溶液の質量に対して溶質の質量を無視するかどうかで答えが違って来る。また (2) は、同物質質量で置き換えるか、同質量で置き換えるかで答えが違って来る。この 5. を時間内にミスなく処理できたかどうか合否に大きく影響したのではないかと推察される。空所補充 1 題、選択 3 題、構造式 (空所補充) 1 題、反応式 2 題、計算 4 題、論述 1 題	標準

設問別講評			
Ⅲ	質量保存則に関する 実験	見慣れない実験装置の原理の理解が問われた。装置のしくみや操作の意味を理解するのに時間を取られたのではないか。1. のア～ウは容易だが、エ、オは不安に思った受験生が多かったであろう。2. は容易だが、3. では黄リンを用いるものと誤解した受験生も多いのではないか。4. の計算と 6. の(2)、(3)はミスなく正解したい。5.、6. (1)の根拠、7. については、戸惑った受験生が多かったであろう。空所補充 1 題、選択 3 題、論述 2 題、構造式 (無機物質) 1 題、計算 2 題	やや難

合格のための学習法

典型問題の演習に留まらず、種々の設定の入試問題にアタックし、対処できる問題の幅を広げたい。同時に、実験や課題研究を通して教科書記載事項に関する理解を深め、実験操作やその意味についても理解を深めておこう。いたずらに難問ばかりを解くよりもむしろ、根本的な物事の考え方、現象の仕組みを理解することによって、新奇な設定に対処できるようになる。また、科学的な文章もたくさん読み、問題文から設定をすばやく理解する力もつけておきたい。